

豊後高田の 磨崖仏



はじめに ～“磨崖仏” 岩肌に刻まれた祈りの証～

自然の岩壁に直接彫られた仏像を一般的に「磨崖仏^{まがいぶつ}」と呼んでいます。自然の岩山に仏像を刻む行為は、インドや中国などアジア地域の仏教圏で広く行われており、日本でも平安時代から各地で盛んに造られるようになりました。

■磨崖仏の宝庫～おおいた～

大分県内には全国の6～7割が集中していると言われるほど、たくさんの磨崖仏が造られました。現在確認されているもので約90ヶ所、約400体もの磨崖仏が所在しています。規模が大きく、優れた造りぶりのものは平安時代後期～鎌倉時代にかけてのものが多く見られます。この時期に大分では天台宗系の仏教文化が浸透し、荘園の支配関係を通じて、中央との結びつきが強かったことが磨崖仏造立の背景^{ぞうりゅう}として考えられています。

■おおいたの磨崖仏～北と南のちがいを～

また、大分県内における磨崖仏は、国東半島^{くにさき}を中心とした県北部と、大分市以南の県中部・南部で分布する凝灰岩の石質によって影響を受け、彫り方などに違いが見られる点は興味深いところです。

県北地域では、火山灰の中に細かな岩石がゴロゴロと混じっている「凝灰角礫岩^{ぎょうかいかくれきがん}」が分布しています。凝灰角礫岩は石質が均一ではないため、深く彫った複雑な表現は難しく、浅くレリーフ状に彫られた磨崖仏が多くみられます（例：熊野磨崖仏）。

一方、県中部・南部には約9万年前の阿蘇山の巨大噴火によって発生した大規模火砕流が冷え固まった「溶結凝灰岩^{ようけつぎょうかいがん}」の岩層が広がっています。溶結凝灰岩は軟らかい上に石質が均一なため、複雑な表現も可能となり、立体的で深く彫り込むことができました（例：臼杵磨崖仏）。

また、豊後高田市でも田染^{たしぶ}地区では一部に良質な溶結凝灰岩の地層があったため、地元では「田染石」と呼ばれて重宝され、同地ではこれらを加工する石材業が発達しました。



《大分県北部》熊野磨崖仏(国重要文化財・国史跡)



《大分県南部》臼杵磨崖仏(国宝・国特別史跡)

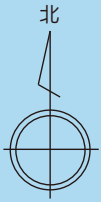
■ぶんどたかだの磨崖仏

豊後高田市には、国東半島を代表する^{くまの}熊野磨崖仏をはじめ、^{なべやま}鍋山磨崖仏、^{もとみや}元宮磨崖仏、^{ふくま}福真磨崖仏など10数か所もの磨崖仏が所在しています。

長い間の風食によって像容がはっきりしない磨崖仏もあれば、高さ7mを超える巨像から、数10cm程度の小さく素朴な姿の磨崖仏まで、像容も^{だいにちによらい}大日如来・^{ふどうみょうおう}不動明王・^{にょいりんかんのん}如意輪観音に六地藏……と実に多様な磨崖仏の姿を見ることが出来ます。これら一つ一つは、国東半島の歴史文化を伝える貴重な石造文化財であるだけでなく、現在でも地域の方々の信仰の場として大切に守られています。

今回、市内に所在する主な磨崖仏を取り上げて解説した小冊子『豊後高田の磨崖仏～ぶんどたかだ文化財ライブラリー Vol.2～』を作成しました。磨崖仏見学の手引きとして、また、豊後高田市の歴史文化を知る一助としてご活用頂ければ幸いです。

豊後高田市教育委員会



- 凡例
- 国指定文化財
 - 県指定文化財
 - 市指定文化財
 - 未指定文化財



原図は、国土地理院発行25000分の1発行地形図を使用。

豊後高田市内の磨崖仏マップ

熊野磨崖仏

・文化財指定
[国史跡・国重文]

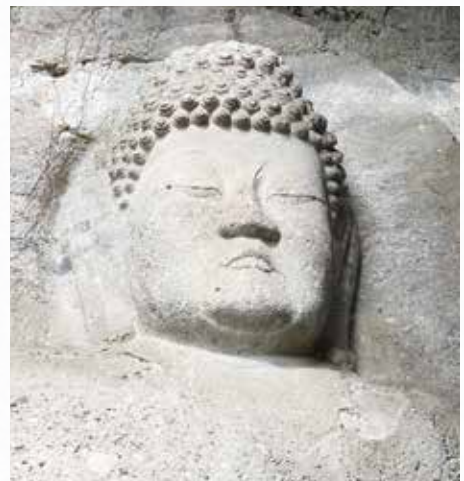
・位置情報
【33°28'41.3"N 131°31'34.3"E】



熊野磨崖仏。右側に大日如来像、左側に不動明王像を彫出している。

熊野磨崖仏は豊後高田市の南端、^{たしぶ ひらの}田染平野地区の山中に所在しています。鬼が一夜にしてつくったとされる百数十段の乱積みの石段を上った先、向かって右側に大日如来像、左側に不動明王像が浮き彫りされています。

大日如来像の像高は約7m。頭部は両耳の後ろまで深く彫られていますが、体の下の方に向かって次第に浅く刻み、^{ひざ}膝上あたりの表現は判然としません。頭部に円光背を負い、^{こうはい}肉髻は高く大粒の^{につけい}螺髪が刻まれています。遠くを見つめるような切れ長の眼、小鼻のはった大きめの鼻、強く引き結んだ口元など、いずれも鋭く力強い像容を見せています。その制作は、国東半島はもとより大分県下の磨崖仏では最も古く、11世紀頃（平安時代後期）のものと考えられています。また、大日如来像の頭上には3面の^{しゅじ まんだら}種字曼荼羅が刻まれています。この地に熊野信仰が入ってくる12世紀後半頃、その守り本尊である不動明王像の造立に併せて^{ついこく}追刻されたと思われます。



大日如来像頭部

不動明王像は像高約8mで、我が国最大級を誇ります。大日如来像に比べて浅彫りで、こちら胸部から下の表現は判然としません。不動明王といえば、厳めしい^{ふんぬ}忿怒の形相を表しますが、こちらは下膨れの頬、穏やかな口元などユーモラスな表情を持ち、親しみやすい造形となっているのが大きな特徴です。像容の形式から、大日如来像より時代が下った12世紀後半頃（平安時代末期～鎌倉時代前期）に制作されたと考えられています。この不動明王の左右下方には、それぞれ3mの^{こんがら}矜羯羅・^{せいたか}制多迦の二童子が刻まれていた痕跡がありますが、風化のために像容の判別は不明です。



不動明王像頭部

また、不動明王・大日如来像ともに体幹部から下を^{こくしゅつ}刻出しないのは、風化によるものとも思われますが、一方で当時の仏師たちが巨大な岩肌に聖なる神秘性を見出し、その中から今まさに仏が出現しようとする様子を意図的に演出したものと捉えることもできます。

■赤鬼のきずいた九十九の石段のはなし ～豊後高田市編『ほとけの里の民話』より～

むかしむかしのお話です。この田染の里に毛むくじやらの赤鬼がやってきて、人間を食べるといのです。それを聞いた熊野の^{こんげん}権現さまは、何かよい方法はないかと考えました。そして、一夜のうちに百の石段をこしらえたら許してやろうと約束したのです。権現さまは、とうていできるはずはないと思っていたのですが、なんと赤鬼はひょいひょいと石を担いで、あっという間に五十段こしらえました。その早いこと早いこと、みるみるうちに九十九段きずいたのでした。

おどろいた権現さまは、百段目の石を担いだ赤鬼の足が山かげに見えたとき、「コケココー！」とニワトリの鳴きまねをしたのでした。赤鬼は「負けたー！」と最後の石を担いだまま逃げ出していったそうです。

今熊野山胎藏寺から、磨崖仏を通して熊野権現さままで続いている石段は、この赤鬼がきずいた石段だそう。



元宮磨崖仏

・文化財指定
[国史跡]

・位置情報
【33°30'56.9"N 131°31'00.7"E】

田染^{もとみや}・元宮八幡社の境内北側の岩壁に、向かって右から毘沙門天・矜羯羅童子・不動明王^{じこく}・持国天・地蔵菩薩の各立像が薄肉彫りされています。中でも不動明王の脇侍^{わきじ}として右側に従う矜羯羅童子の合掌して仰ぎ見る姿は愛らしく見えます。左側には制多迦童子が刻まれていたとされますが、現在はその痕跡もありません。中央の不動明王が一番大きく彫られており、像高は207cmあります。一方、左端に一際小さく表されている地蔵菩薩は像高134cmで、この像だけは後の時代の追刻といわれています。なお、当初のものかは不明ですが、磨崖仏の仏龕^{ぶつがん}の周囲には四角形のホゾ穴^{うが}がいくつか穿たれており、かつては磨崖仏を風雨から守るための覆屋^{おおいや}が建てられていたことを窺わせます。



元宮磨崖仏



元宮八幡社

不動三尊に四天王のうちの二尊が脇を固めて、地蔵菩薩が添えられる尊像配置の意味するところは不明です。しかし、隣接する元宮八幡社との関係でみると、八幡神をとりまく諸々の神様の「本地仏^{ほんじぶつ}」を表したものとも考えられています。

各像とも顔つきはシャープで、写実味のある鎌倉彫刻の雰囲気を残しており、制作年代としては南北朝時代につくられたと考えられています。平安時代後期、宇佐宮領・田染荘の鎮守として勧請^{かんじょう}された元宮八幡社が、田染荘の拡大発展とともに田染二宮、三宮と分祀^{ぶんし}されたのが1351年（観応2）と伝わることから、元宮磨崖仏がこの頃につくられたとしても、時代的に不自然さは無いものと思われれます。

鍋山磨崖仏

・文化財指定
[国史跡]

・位置情報
【33°30'04.6"N 131°31'42.3"E】

鍋山磨崖仏は、田染上野から杵築市大田へ向かう桂川左岸、切り立った鍋山の中腹に所在します。

高さ4.5m、幅2mほどの岩面に不動三尊立像（不動明王・矜羯羅童子・制多迦童子）が彫られています。大きさは中尊の不動明王立像で約230cm、二童子が約120～130cmほどありますが、風化のため、細部の表現が不明瞭なのが惜しまれます。

深めの彫りと均整の取れた像容は、平安時代末期～鎌倉時代初期の造顕を思わせませす。不動三尊の図像的には、田染真木の真木大堂に所在する「木造不動明王・二童子立像」（国重文・平安時代後期）と類似しており、これをモデルにして鍋山磨崖仏の不動三尊像が造立されたとも考えられています。

また、鍋山磨崖仏が位置するところは、古代の田染地区の開発と深い関係があるとされます。磨崖仏のある場所から桂川へ下りると、鍋山井堰という大型の井堰があり、田染盆地の上野条里を広く灌漑していたことが分かっています。磨崖仏や井堰に利用しやすい岩盤が付近に多かったこともありますが、磨崖仏の多くは水源地に造られ、水に対する信仰も担っていました。磨崖仏の所在する場所と、人々の歴史を重ね合わせてみると、当時の人々の祈りの姿を知ることが出来ます。



鍋山磨崖仏 不動三尊立像



木造不動明王・二童子立像(真木大堂蔵)

川中不動

・文化財指定
[国名勝・県史跡]

・位置情報
【33°34'42.1"N 131°32'26.0"E】

^{ながいわや}長岩屋にある六郷山寺院・^{てんねんじ}天念寺の講堂前を流れる、長岩屋川に突き出た大岩の前面に不動三尊立像が彫られています。像高は不動明王像で約270cm。図像的には、天台宗の不動三尊の形式に忠実ですが、作りぶりは稚拙かつ素朴です。しかし、制多迦童子の“ぶっくり”とした表情などは微笑ましくもあります。

長岩屋川の氾濫を鎮めるために造立されたと伝わっており、室町時代～戦国時代にかけてつくられたものと考えられています。



川中不動 三尊立像

天念寺磨崖役行者像

・文化財指定
[国名勝]

・位置情報
【33°34'42.8"N 131°32'26.1"E】

“^{しゅじょうおにえ}修正鬼会”の舞台として知られる天念寺講堂の横に広がる岩面に磨崖像が見られます。

この像は^{しゅげんどう}修験道の始祖とされる^{えんのぎょうじゃ}役行者(役小角^{えんのおづぬ}(634～701))を彫ったものです。岩座に腰を掛け、高下駄を履いて^{しゃくじょう}錫杖を持った姿で表現されることが多くあります。

戦国時代～江戸時代前期にかけて、国東半島には宇佐や日出あたりから^{ひじ}山伏(修験者)^{やまぶし}が流入してきました。本像も戦国時代頃の作とされ、山伏たちがつくったものであると考えられています。



天念寺磨崖役行者像

福真磨崖仏

・文化財指定
[県史跡]

・位置情報
【33°35'05.6"N 131°32'00.1"E】



福真磨崖仏(三次元実測図)

石造覆屋保存修理工事(平成27～29年度)に伴い、覆屋解体後に別府大学による彫刻面の実測調査が行われた。

豊後高田市下黒土^{しもくろつち}に所在し、真玉川南岸^{またま}の小高い岩場の崖面に東面して磨崖仏は刻まれています。磨崖仏のある場所から更に石段を登ると、「四王権現^{しおうごんげん}」と呼ばれる小堂があり、この場所が平安時代末期～鎌倉時代前期頃まで本尊・四天王像を安置した有住の寺院として機能していたと考えられています。このような古くからの祈りの空間として認識されていた場所に、福真磨崖仏^{ふくま ぞうけん}は造顕されました。

大日如来坐像を中心に置き、その四方に4体の如来坐像^{あしゅく}（阿闍^{ほうしやう}（東方）・宝生（南方）・阿弥陀^{あみだ}（西方）・不空成就^{ふくうじやうじゆ}（北方））を配して、「五智如来^{ごち}（金剛界五仏）」を構成しています。五智如来の右面には、上下2段に各3体ずつで6体の観音坐像が、左面にも上下2段に各3体ずつで6体の地藏坐像が彫刻されています。さらに左端には毘沙門天^{びしゃもん}、右端には不動明王が彫られており、真ん中に鎮座する仏様たちを守護する“ガードマン”の役割を担っています。

福真磨崖仏には合計19体もの仏像が彫刻されており、いずれも薄肉彫から半肉彫の小像ですが、緻密^{ちみつ}でシャープな彫り口の一方、やや萎縮^{いしゅく}した造形感覚に鎌倉時代後半～末期にかけての造顕を思わせます。五智如来に六観音と六地藏を組み合わせる図像に、密教の理念と六道思想の影響がみられるとともに、左右端に脇侍として毘沙門天・不動明王を配する点に、天台系の影響を感じさせます。

磨崖仏を風雨から守るため、外側に屋根をかけた保護設備を「覆屋」と呼びます。福真磨崖仏には横幅約4.7m、奥行約1.3~1.5m、高さ約2mで、柱・腰壁・桁・葺石・鬼板などの各部材を噛み合わせて建てられた総石造の覆屋が存在します。石造でありながら、木造建築を強く意識した構造・意匠となっており、この特異な石造覆屋については管見の限り、福真磨崖仏以外に類例を確認できていません。覆屋の造立については江戸時代末期の1857年(安政4)に、地元の真玉・大岩屋出身の石工である安藤源平国恒と、その弟子・鴛海東八によってつくられたことが、覆屋正面右側の腰板石に刻まれています。



福真磨崖仏 毘沙門天立像(左)と不動明王立像(右)



福真磨崖仏石造覆屋(1857年(安政4)造立)

■石造覆屋の作者・安藤国恒 ~真玉が生んだ江戸時代後期の名石工~

安藤国恒は江戸時代後期の1822年(文政5)に生まれ、1871年(明治4)に50歳で亡くなるまで、真玉各地の寺院・神社に多くの作品を残しました。主な作品として真玉八幡神社参道入口にある、頭に火袋をのせた一對の狛犬(右写真)や、応暦寺の石造馬頭観音像などがあります。ユーモラスで大胆な造形が魅力の職人で、当時から非凡な才能を発揮していたと思われます。

福真磨崖仏石造覆屋は、国恒36歳の時の作品です。その2年前の1855年(安政2)には、技能優秀な職人に贈られる「法橋」という称号を受けており、まさに職人人生の黄金期において、国恒は石造覆屋を造り上げたといえるでしょう。



堂ノ迫磨崖仏

・文化財指定
[県史跡]

・位置情報
【33°35'39.8"N 131°31'26.0"E】



堂ノ迫磨崖仏。左から順に六観音像、閻魔像、六地藏立像、比丘・比丘尼像、司録像が刻出される。

豊後高田市大岩屋にある^{おうれきじ}応暦寺の境内から、奥の院に向かって山道を250mほど登ったところに^{どうのさこ}堂ノ迫磨崖仏があります。六観音と六地藏に^{えんま}閻魔・^{しりょう}司録を組み合わせる尊像配置は、いわゆる「^{ろくどうしそ}六道思想」に基づいたものと思われます。これに夫婦とみられる^{そうぎょう}僧形と女人の^{びくびくに}坐像（＝比丘・比丘尼像）が加わっています。恐らく、この磨崖仏の願主とみられ、^{ぎやくしゆ}逆修（＝生前供養）の趣意から造顕されたものと考えられています。室町時代前半の15世紀頃に造られたと思われ、六観音と六地藏を対比させる構成は、近在する福真磨崖仏の影響を受けているともみられています。なお、磨崖仏が造られた当時の^{おうれきじ}応暦寺は、末寺末坊25ヶ所を抱える六郷山中山分の中核的寺院として存在したことが知られています。

■六道思想とは？

仏教には“^{ろくどうりんね}六道輪廻”という考え方があり、全ての生き物は6つのいずれかの世界（天道・人道・修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道）に生まれ変わり、それをグルグルと繰り返している…とされていました。六観音や六地藏というのは、観音菩薩・地蔵菩薩が六道の世界にそれぞれ姿を現して、救いの手を差し伸べてくださると考えられました。

■司録とは？

死後に亡者を裁く裁判官（十王）の一人。^{しみょう}司命と共に閻魔王の判決を記録する書記官とされます。手に筆を持ち、書き留めようとするポーズをとります。

城山薬師堂四面石仏

・文化財指定
[県有形]

・位置情報
【33°29'50.6"N 131°31'12.0"E】

田染真木にある城山薬師堂は、江戸時代に描かれた「真木村絵図」に登場する霊場で、^{しろやま やくしどう} 後背の城山から伸びる尾根の末端にある巨大な安山岩（高さ227cm、横幅258cm、奥行197cm）の四面に彫られた石仏で知られます。

石仏は室町時代に制作されたと考えられており、岩の四面には10体の仏像が彫出されています。このような形式の石仏は他に類例が無く、国東半島の石造物の多様さを示す作例の一つとして評価され、2019年（平成31）3月に大分県指定有形文化財に指定されました。

10体のうちの半分は阿弥陀如来像が占めており、今日“薬師堂”という名称で伝わってはいますが、四面石仏は阿弥陀信仰によって造立されたと考えられています。

制作された順番についても、背面（南面）にある像の作りが良く、初期に制作されたと考えられ、その後、側面（東・西面）や正面（北面）の像がつけられていったと推定されています。一度に造られたものではなく、造立には長い年月がかけられたと思われる。

また、薬師堂裏手には室町時代の作とされる城山国東塔（^{しろやまくにさきとう} 県有形）があり、市内でも特に美しいとされる国東塔の一つです。



城山薬師堂



城山薬師堂四面石仏(北面／御堂入口正面)



城山薬師堂四面石仏(東面)
保存状態がよく、造顕当時の様子がよく分かる。

梅ノ木磨崖仏

・文化財指定 [国名勝・県史跡] ・位置情報 【33°36'51.4"N 131°33'00.7"E】

梅ノ木磨崖仏は豊後高田市夷字梅ノ木の山中に所在します。幅約4mの岩壁に彫られており、中尊は縦横約1mの枠取りの中に、像高40cmの地蔵菩薩像（地元では仁間菩薩と伝わっています）を浮彫しています。地蔵尊の左側には像高68cmの比丘像が、右側には像高40cmと37cmの比丘尼像が彫られており、左右の像で地蔵尊を拜んでいるような姿をしています。これらは、南北朝時代の作とされています。この他にも、同所には磨崖五輪塔や線彫板碑なども見ることができます。



梅ノ木磨崖地蔵尊(伝・仁間菩薩像)

大門坊磨崖仏

・文化財指定 [市史跡] ・位置情報 【33°30'42.2"N 131°30'57.2"E】

“大門坊”とは、かつて田染盆地に栄えた幻の大寺「伝乗寺」(現・真木大堂)の末坊の一つであったとされています。大門坊磨崖仏は、崖面の北側から南側にかけて5体の尊像が薄肉彫されています。北側から順に毘沙門天立像、薬師如来坐像、大日如来坐像、尊名不詳の仏像、不動明王像が一行に並んでいます。

風食やコケ類、植物の繁茂が進んでおり、見づらいところもありますが、大らかでやや稚拙な表現やつくりから、室町時代(15~16世紀)の造立と思われます。



大門坊磨崖仏
薬師如来坐像(右)と大日如来坐像(左)

六所神社磨崖像

・文化財指定 [国名勝・市有形] ・位置情報 【33°37'04.5"N 131°33'26.1"E】

豊後高田市夷にある六所神社の門を入ると、右手の岩壁に3体の像が刻まれています。中央の尊像は像高80cmほどあり、室町時代の造頭とされています。その姿から、僧形八幡神像（仁間菩薩）として祀られています。両側には男女の像が彫られており、これらの尊像が収まる石造覆屋は、近年になってつくられたものです。

ここから一段上った旧六所権現とされる岩屋入口の崖面にも磨崖像があり、この像もまた六郷満山の開基・仁間菩薩を表したものと伝わっています。



六所神社磨崖像

地藏堂磨崖仏

・文化財指定 [未指定] ・位置情報 【33°32'02.7"N 131°31'17.1"E】

田染路の中村地藏堂（愛宕地藏堂）にあり、約2m四方の自然石に、中央に地藏菩薩坐像（像高56.5cm）、右側に比丘形坐像（像高45cm）、左側に比丘尼形坐像（像高49cm）の3体が表されています。室町時代ごろの造頭と思われます。付近に所在する「其ノ田板碑」（県有形）の銘文にある“地藏堂講衆”の場と推定されています。

また、地元では歯痛に御利益がある仏様として親しまれており、お礼参りの際には、竹楊枝を歳の数だけお供えするという民間信仰があったと伝わっています。



地藏堂磨崖仏
地藏菩薩坐像(中央)と比丘(右)・比丘尼像(左)

■磨崖仏見学の注意事項

- 磨崖仏は貴重な文化財ですから、大切にしましょう。磨崖仏に直接触れるような行為はお控え下さい。
 - 磨崖仏は地域の方々の信仰の対象でもあります。見学に際しては、立入に十分注意して、マナーを守って行動しましょう。
 - 磨崖仏の中には山中に所在するものもあります。ヘビやダニ、イノシシなど、害のある虫や植物などに気をつけましょう。また、山歩きの際は、動きやすい靴・服装で出かけ、地図やGPSなどの準備もしておきましょう。
- ※本冊子では、各磨崖仏の【位置情報】を表記しています。場所検索の際の参考・目安にご利用下さい。但し、必ずしも磨崖仏本体の正確な位置を示すものではありません。

■「ぶんどたかだ文化財ライブラリー」シリーズ バックナンバー



- Vol.1 『豊後高田の城跡』 平成31年3月31日発行
豊後高田市に所在する約30ヶ所の中世城館のうち、高田城跡、屋山城跡など市内の代表的な城郭7つを紹介しています。

※バックナンバーは豊後高田市ホームページ内でデータ公開中！

詳しくは



【参考文献】 大分県教育庁埋蔵文化財センター (2016) 『豊の国考古学ライブラリー 2 大分の石造物～中世編～』 / 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 (1986) 『豊後国田染荘の調査1』 / 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 (1996) 『石造文化財の保存対策のための概要調査—石造文化財の基礎調査報告書—』 / 大分県立歴史博物館 (2018) 『聖なる霊場・六郷満山』 戎光祥出版 / 香々地町教育委員会 (1994) 『香々地町の文化財』 / 九州国立博物館 (2017) 『六郷満山開山 1300 年記念 大分県国東宇佐 六郷満山展～神と仏と鬼の郷～』 / 酒井富蔵 (1972) 『国東半島の石造美術』 / 中畑区山園会・豊後高田市教育委員会 (2018) 『大分県指定史跡 福真磨崖仏石造覆屋保存修理事業報告書』 / 豊後高田市 (1996) 『豊後高田市史 特論編—くにさきの世界 くらしと祈りの原風景—』 / 豊後高田市 (1998) 『豊後高田市史 通史編』 / 真玉町誌刊行会 (1978) 『真玉町誌』

ぶんどたかだ 文化財ライブラリー vol.2

『豊後高田の磨崖仏』

発行：豊後高田市教育委員会文化財室
〒872-1101 豊後高田市中真玉2144番地12
TEL：0978-53-5112 / FAX：0978-53-4731
E-mail：bunkazai@city.bungotakada.lg.jp

発行日：令和2年2月12日発行
印刷：有限会社 宗印刷所
表紙：福真磨崖仏(左:大日如来坐像 右:如意輪観音坐像)